IS<インフィニット・ストラトス> -亡霊は黄泉路より舞い戻る-

イクリプス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜　－亡霊は黄泉路より舞い戻る－

【Ｎコード】
Ｎ２１８４ＢＡ

【作者名】
イクリプス

【あらすじ】
ある意味、『仮面ライダー白式』の三次創作で、仮面ライダー成分抜いて原作の疑問点に自分なりに理由付けをした、そんなお話。
こちらはサブ連載のシリアス担当になります。

プロローグ：簡易年表（前書き）

サブ連載なのでメインの『仮面ライダー白式』より不定期の更新となります

プロローグ：簡易年表

■１０年前
篠ノ之束、宇宙開発用マルチフォームスーツ、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の開発を開始。
一ヶ月後、試作一号機《白騎士》完成。

試作一号機の完成から一ヶ月後、各国のミサイルがハッキングを受けて日本に放たれ、これを《白騎士》が撃墜。
見事日本本土を守護し切った。
後にこの事件は日本を守護しきった機体名から白騎士事件と呼ばれる事となる。
この件を受けて各国はこぞってＩＳを自国の防衛戦力として採用。
数に限りがある上に女性しか使えないとはいえ、その戦闘能力は圧倒的の一言で、ＩＳが普及するにつれて世界情勢も女性優遇から女尊男卑へと変わっていく。

白騎士事件からちょうど二ヶ月後、自動車事故により織斑一夏死亡。
その直後、謎の復活を遂げる。
関係者以外、この事件について知る者はおらず、世間には事故によって入院した後に退院したと認知されている。

■６年前
第一回モンドグロッソ開幕。
初代優勝者である織斑千冬は試作二号機《暮桜》を以ってブリュンヒルデの地位に上り詰めた。
また、この件で織斑千冬の圧倒的技量もさることながら、篠ノ之束

の圧倒的技術力を再び世にしらしめる事となる。

■2年前

第二回モンドグロッソ開幕。

決勝戦当日に優勝候補である織斑千冬の弟、織斑一夏が亡国機業（ファントム・タスク）によって誘拐された為に織斑千冬は試合を放棄、ドイツ軍からのリークで織斑一夏の居場所を突き止めるも、時既に遅く、殺害された織斑一夏だけが現場に残されていた。

その後、織斑千冬に同行していたドイツ軍ＩＳ部隊、シュヴァルツェア・ハーゼによって織斑一夏の遺体は回収されるも、輸送中に所属不明のＩＳの襲撃を受けて遺体は強奪されてしまう。

そしてその二日後、篠ノ之束に連れられて黄泉還った織斑一夏が織斑千冬のもとに帰還。

この件もまた世間には伏せられ、織斑一夏は誘拐された後に無事救出されたと世間に伝わっている。

■現代

織斑一夏、世界初の男性ＩＳ操縦者として表舞台へ。

プロローグ：簡易年表（後書き）

二度の死を向かえ、三度目の生を受けた亡霊、織斑一夏。
この物語は黄泉路を逝き来した彼と、彼の為に世界を変えた彼女の物語。

第００１話：「亡霊来たる」（前書き）

サブ連載シリアス担当、その第一話目になります

第００１話：「亡霊来たる」

女尊男卑。

１０年前の白騎士事件を機に変わり果てた世界。
その象徴たる戦乙女の鎧、インフィニット・ストラトス。
通称ＩＳと呼ばれるその鎧はたった一人の天才によって作られた代物だった。
あらゆる方面で他の兵器を凌駕したＩＳは事件を機に瞬く間に世界各国に採用され、その普及と同時に広まる女性優遇はやがて女尊男卑へと変わり、第二世代機に分類される機体が各国で開発される頃にはその気風が世界中に蔓延していた。

何故か。

開発者である篠ノ之束がＩＳのコアを女性にしか扱えない代物として製造したからである。
コレについては諸説あり、人間嫌いで有名であった篠ノ之束は特に男性嫌いだった説、親友である織斑千冬が女性である為、セキュリティの一環で女性にしか反応しないように製造した説など、数多の説がまことしやかに噂されているが、どれも皆ハズレであり、”とある目的”の為に女性である方が適任だった為にたった一機を除き、全てのＩＳは女性にしか反応しない様に出来ていた。
その”本来の目的”を知る者は開発者である篠ノ之束を含めた四名のみであり、”変更された後の目的”を知る者もその四名だけである。

機は、まだ熟してはいない。

だがしかし、事はいつ一刻を争う様な事態に転んでもおかしくは無いところまで来ていた。

だからこそ、彼の者は舞い降りる。
祭壇たるその地へと。

春、学生にとっては新学期を迎える季節であり、それはここＩＳ学園においても例外では無い。
ＩＳ学園とはＩＳに関わる人材の育成を目的とした教育機関であり、同時にＩＳ自体の研究機関でもある。
といっても、ＩＳ自体の絶対数が５００にも満たないために国家代表の候補である代表候補生にでもならない限り卒業後まで本格的にＩＳに関われる者は少ないのだが、それでも超難関高だけあって学園を卒業するだけでも卒業後の進路に困る事は無い。
それどころか、より取り見取りと言ってもいい。
勿論、これは一般生徒のまま卒業した者の場合であり、既に国家代表であったり代表候補生である者にとってこの学園はただの学び屋では無い。
国家代表や代表候補生は自身に宛がわれた専用機の完成を目指す為にこの学園に所属しているのだ。
ここでいう専用機というのは特殊装備を取り扱う専用の機体という意味での専用機であり、国家代表や代表候補生がそれぞれの機体の専属の操縦者となる為、一見個人専用の機体に見えるが個人の個性に合わせてチューニングが為されている程度で決して個人専用に造られた機体では無い。

そんな、それぞれの立場とそれぞれの思惑が渦巻くこの学園に、異物が紛れ込んでいた。
一年一組の教室、中央の列の先頭の席に座る者。

女性しか扱えない為に必然的に女子高と化したこの学園に紛れ込んだ、例外たる”男”。

その名を、織斑一夏と言った。

始業式も終わり、少し休憩を挟んだ後、あいうえお順にクラスメイトの名を副担任の山田真耶が名簿から順次読み上げ、己の名を呼ばれた生徒は教壇に立って軽く自己紹介。
そうやって潰されていく最初のＨＲの時間の中で、遂にその時が来た。

「では、織斑一夏君」
「……はい」

真耶の呼び掛けに一拍遅れで答えた少年、織斑一夏が席を立ち、教壇に歩み寄る。

「……織斑一夏です、よろしく」

教壇に立ち、名前だけの自己紹介を済ませた一夏の姿に、生徒達は息を飲んだ。

病的な、どころの話ではない。
まるで死体の様に青白い肌をした、少年の亡霊。
有り得ない、或は有ってはならない違和感の具現がそこには在った。
亡霊と形容される様な雰囲気ではあるが、決してその手の存在に有りがちな不確かさは無く、しっかりと背筋を伸ばしたその姿は寧ろ

確かな存在感を醸し出しており、だからこそ違和感を撒き散らす。
そんな少年だった。

そんな、存在感の在る亡霊たる少年は、動揺を隠せない周囲の反応を特に気にした風でも無くただ眺め、暫くして席に戻る。

「え、え～と、次は織目洋子さん」

動揺の余韻で異様に静まりかえった教室に、上擦った真耶の声が虚しく響き、呼ばれた少女も気の毒なぐらいこの空気に飲まれて調子を崩されていたが、中学まで学級委員を熟して来た矜持からか、自分がしっかりせねばと気を取り直して教壇に立ち、自己紹介を終えた。

そんな彼女のささやかな活躍があったからか、次第にクラスメイト達も元のテンションを持ち直し、円満に皆自己紹介を終え、最初のＨＲは終わった。

最初のＨＲ、最初の授業が順次終わり、昼休みを迎えた教室。
教室にいる生徒の数はまだまばらで、殆どの生徒はまだ食堂で過ごしていた。
というか、なるべく教室に……教室に残った一夏を視界に入れたく無いというのが少女らの本音であり、女尊男卑以前に亡霊染みた少年を見続けるのは精神衛生上あまりよろしく無かった。
だから、今この教室に居る生徒は件の少年を含めて四名しかいない。

一人目、件の亡霊たる織斑一夏は眠っているのか、自分の席に着いたまま腕を組んで目を閉じて微動だにしない。

二人目、隣の席からその亡霊を見守る様に眺める少女、篠ノ之箒は

食堂から教室に戻ってからずっとこんな調子だ。

三人目、代表候補生という立場から、件の亡霊と要人の姿を観察している少女、セシリア・オルコットも今日は食堂で軽く食事を済ませてからずっと二人の様子を観察している。

四人目、もう一人の観察者たる少女、布仏本音は出来たばかりの友人らと怖いもの見たさに教室に集まったフリをして、結局友人達は教室まで足を踏み入れなかったので結果的にグループの中で一人だけ教室の中に入った状態で一夏と箒の様子を観察している。

二人の観察者に観察される二人の男女。

織斑一夏と篠ノ之箒。

どちらもこの業界では超の着く程の有名人である。

……といっても、その有名さは二人がこの業界で何らかの業績を残した事に起因するものでは無く、単にそれぞれの姉が有名過ぎる為に巻き添えを喰らった形で有名になっただけであり、一般生徒と同じで二人ともまだこの業界に足を踏み入れたばかりの素人だ。

少なくとも、”表向き”は。

「どうだ？　身体の調子は」

「……あぁ、大丈夫だ。今はまだ、な」

不意に問うた箒に、やはり一拍遅れで答えた一夏は、身振りこそしっかりとしてはいるが、声が掠れているせいで本人が言うほど体調が良い様には見えない。

「だいじょ～ぶ？」

「その…、辛いのなら無理せず医務室に行った方が良いのでは……？」

そんな彼を心配するフリをして……実際、一夏の顔色を見れば誰でも心配するが、まるで心配になって声を掛けた善良な生徒の様に話し掛けた二人の声に、また一拍遅れで一夏は答える。

「……あぁ、二人とも俺の顔色を見て言ってるんだろうが……まぁ、これは事故の後遺症の様なものでな」

「「事故？」」

白々しさを感じさせない仕種で、二人が問う。

どちらも、一夏の経歴ぐらい（可能な範囲とはいえ）調べ尽くしている為、どんな事故だったのかぐらいは見当が着いていたのだが、初めて知った風な態度を取った。

「……セシリア・オルコットと、布仏本音…だったか？　”お前らなら”だいたいの見当は着いているんだろう？」

「「！！？」」

「……第二回モンドグロッソの時に、”ちょっと”な。……まぁ、これ以上は一般生徒が知っていい話じゃないし、後は自分で調べてくれ。それに、俺が一々喋らなくても、その内解るだろ？　俺の事なんて」

「そ～だね」

「え、えぇ…」

調べる側だと思っていた自分達が、逆に調べられていた。

その事に驚愕した二人は会話を続ける事が出来ず、ただ上擦った声で応答するので精一杯だった。

代表候補生という表に出る立場上、セシリアがどんな任務を受けて

近づいたのかを察せられてもおかしくは無かったが、本音の場合は違う。
更識家の従者の家系である布仏家は主家共々裏側の家系であり、一般には単に金持ちとその従者の家系といった程度にしか知られていないハズなのに、どういったワケか一夏は本音の事すら看破して見せた。

（……そっか）

しかし、本音もその道の者である以上、いつまでも不様に動揺してはいられない。
日々の鍛練の賜物か、動揺を見せたのもほんのつかの間で、すぐにその原因に思い至る。

（あ～あ、やっぱり篠ノ之博士相手じゃ私達の秘密も筒抜けかぁ～）

当然といえば当然の事だった。
女性にしか扱えないハズの代物を唯一扱える男性。

その男性の姉はそんな代物を造った人物の親友であり、彼が唯一の存在に成る為にはどうしても関わらなければならない人物が、彼の後ろに控えていないワケが無い。
１０年前、己が発明品の有用性を世にしらしめる為だけに各国のミサイルをハッキングし、日本に向けて発射させた張本人、篠ノ之束。
彼女が織斑一夏の背後に控えていないと思えと言う方が無理がある。
ましてや、此処には彼女の妹がいるのだ。
明らかに彼女の力が及んでいると見てまず間違い無い。

「ん～でも、辛かったらちゃんと言わなきゃダメだよ？」
「……あぁ」

気を取り直して話題を振り出しに戻し、友人達の方へと本音は戻って行った。
流石にこのまま会話を続けるのはマズいと、裏側の勘が告げていたのだ。

「えっと……その、オリムラさんはどのぐらいＩＳを動かした事がお有りで？」

仲間……というワケでは無かったのだが、本音が去った事によって結果的に二対一になってしまい、本音の様に去ろうにも場の雰囲気的にそうする事も出来ず、仕方なしに話題を搾り出した。

「……どのくらい、か。ちゃんと動かしたのを含まなくてもいいんなら、束さんがＩＳを造ってからずっと、だな」
「そんなに…」

殆どその場凌ぎで搾り出した話題に律儀に答えた一夏だったが、その答えにセシリアは出鼻をくじかれてしまう。
咄嗟の思い付きとはいえ、これで一夏が殆どＩＳを動かした事が無いと答えていれば、では自分が指導を……と、続けられるハズだったのに、それも出来そうにない。

「……気遣いは有り難いが……お前の方こそ大丈夫なのか？」
「わっ、私は代表候補生ですのよ！？」
「……でも、”まだ曲げられない”んだろ？」
「なっ！！？」

どこまで知られているのかと、恐ろしくなった。
冷静に考えれば開発者である束がコアネットワーク経由で情報を蒐

集しているのだろうが、だからこそ恐ろしいとも言える。
何故なら、ことＩＳに関して言えば一夏に隠し事など不可能である事に外ならないからだ。

「も、問題ありませんわ！」
「……そうか。ならいい」

明らかに虚勢とバレている様だったが、一夏は深くは追求しなかった。

「……あぁ、そういえば」
「どうしましたか？　織斑先生」
「いや何、そういえばまだクラス代表を決めていなかった事を思い出してな」
「あ、そういえばそうでしたね」

教鞭を振るいながら授業を行う千冬が、ふと思い出したかの様に呟き、真耶も言われて思い出したといった風に頷いた。
会議が長引いたせいで午前の授業は全て副担任である真耶に任せていた千冬だったが、午後からはこうして例年通り自身が受け持ったクラスで教鞭を振るっている。

……が、しかしどうにも今年はクラスの雰囲気が異質に感じられた。
原因は考えるまでもなく自身の弟の存在だろうと気付いていた千冬だったが、気にするなと生徒に言い聞かせるのも酷に感じて何も出来ないでいたのだ。

これがただ女の園に男が一人というだけの事であったのなら浮かれている生徒を窘めるだけで済んだのだろうが、見ての通り、最前列に座る件の男である弟はまるで死者の様に青白い顔で、ただ静かにそこにいる。
原因があってその結果としてそうなっていて、そしてそれがどうしようもない事だと解っている千冬だからこそ動揺を表に出す事はしないが、何も知らない者が見れば自身の弟が酷く気味の悪い存在に見えている事も自覚していた。
実姉である千冬ですら暗い部屋に一夏が佇んでいるのを見れば一瞬幽霊でも出たのかと錯覚するのだ、生徒達に怖がるなと言うのが無理がある。

幸い、周りが自身をどう捕らえているか理解してしまっている一夏も、特に傷付いた風でも無いように見えた。
が、しかし、事が事だ。
傷付いていないのではなく、感情を表情に繋げられなくなっている可能性も……最悪、感情すら満足に紡げなくなっている可能性もある。
だからこそ、千冬は親友の提案を承諾し、弟を自らが受け持つクラスに編入させたのだ。

「さて、この手の役職は専用機持ちが行うのが通例だが……何の因果か、我がクラスには専用機持ちが三人も居てな」
「ち……織斑先生、今此処にいる専用機持ちは二人だ。私のはまだ姉さんの所で調整中なのでな」

手筈通りの会話。
計画通りの、全ては弟の為の布石。

「篠ノ之の機体が使えない以上、我がクラスの専用機持ちは織斑、

オルコットの二名という事になるが……二人ともどうしたい？」
敢えて強制はせずに二人に委ねる。
「……決闘ですわ」
「ほう、それはまたどうして？」
「代表候補生では無いとはいえ、専用機持ちである以上オリムラさんも素人というワケでは無いでしょう。それに、聞けばオリムラさんは搭乗時間のみに限定しなければＩＳが世に出回った時からずっとＩＳに触れてきたそうなので」
「どうする？　オルコットはこう言っているが」
「……俺は、どっちでも構わない。好きな様にすればいい」
「なら、決まりだな」

どの道、こういう流れになる事はわかっていたのだから。
セシリアは……というかイギリスは、一夏に関するデータを少しでも多く欲している。
一夏が唯一の男性ＩＳ操縦者になれた秘密を、束がこしらえた第三（或は第四）の機体のデータを欲しているのだ。
だから、口実さえ与えてしまえば必ず一夏とセシリアは戦う事になっただろうし、勝敗に関わりなくより多くのデータを蒐集する為に一夏がクラス代表になるであろうことは想像に難くなかった。

そして、イギリスによる一夏に関するデータの独占を良しとしないであろう各国が、これを機に自国から代表候補生を送り込んでくるであろうことも。
勿論、すべて受け入れるつもりだ。
その為の４６７の生贄であり、儀式は既に始まっているのだから。

それぞれの思惑を胸に、誘蛾灯に誘われるがままに集う数多の戦乙女達。
その魂を食らうは、亡霊を蔵した白き騎士の為れ果て。
最初の儀式のまで、あと三時間。

第００１話：「亡霊来たる」（後書き）

その男の存在は、一体誰の未練だったのか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2184ba/

IS<インフィニット・ストラトス> -亡霊は黄泉路より舞い戻る-

2012年1月6日09時46分発行